

## 日常に散在する比喩表現と概念形成

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009982">https://doi.org/10.14945/00009982</a>

# 日常に散在する比喩表現と概念形成<sup>1</sup>

大村光弘

## 1 はじめに

世間一般に比喩と言え、(1)の定義が示すように、修辭的な文飾の技巧のことだと考えられている。

- (1) 文学的な表現において、心象imageを利用して、説明、記述をわかりやすくし、強調や誇張の効果をあげるために、類似した例や形容で表現すること。

(『ブリタニカ国際大百科事典』)

しかしながら本稿では、メタファー (metaphor) とメトニミー (metonymy) という2つの比喩を中心に考察し、この2つが単なる言葉の綾ではなく、以下に示した2つの特徴を持つこと (Lakoff and Johnson (1980)) を明らかにする<sup>2</sup>。

- I. メタファーとメトニミーは、言葉や表現といった点だけでなく、思考や行動に至るまで、日常の営みのあらゆるところに深く浸透している。
- II. メタファーやメトニミーは、私たちが思考したり行動したりするときに用いている概念を形成する際に、重要な役割を果たしている。

メタファーやメトニミーが概念形成において重要な役割を果たしているという

---

<sup>1</sup> 本稿は、高大連携講座の一環として行った出張授業 (於・静岡県立磐田南高等学校、平成28年9月14日) の講義内容を論文形式でまとめたものである。

<sup>2</sup> 本稿では、シミリー (simile)、メタファー (metaphor)、メトニミー (metonymy) に対してカタカナ表記を用い、和名の直喩、隠喩 (または暗喩)、換喩は用いないこととする。

ことは、すなわち、これらが精神（＝心、脳）のはたらきであることを意味している。

## 2 比喩とは

本稿では比喩を(2)のように定義し、(3a)－(3c)に示した3種類の下位類を想定する。

(2) 比喩とは、あるものをそれと共通点のある別のもののだとして取り扱うこと、すなわち「見立て」であると定義する<sup>3</sup>。 (瀬戸 (1995))

(3)a. シミリー (simile) :

「・・・のようだ」を意味する言葉を用いてたとえる方法。比喩法としては最も直截で単純なもの。 (『ブリタニカ国際大百科事典』)

b. メタファー :

「氷の刃」「彼女は天使だ」のように、「～のような」にあたる語をもちいないたとえ。 (同上)

c. メトニミー :

ある物を言い表す場合に、その物の属性や、それに関連の深い物をもって言い換えて、その本体の物を表す方法。 (同上)

シミリー、メタファー、メトニミーという3種類の比喩の中でとりわけ重要なものは、メタファーである。これは、メタファーの機能が、「類似性を基にある概念を通して別の概念を理解すること」だからである。シミリーもメタファーに似た理解の機能を持つことがあるが、間接的で副次的である。これは、シミリーの主眼が「[～に似ている、～のような]とといった比喩指標を用いることで類似性を合図すること」にあるからである。また、メタファーの作用全体を眺めた場合、概念間に類似性を見いだすことは作用を誘引する起点として位置づけられるものなので、シミリーの機能をメタファーと同等なものとして扱う意味はないと思われる。最後にメトニミーとは言えば、シミリーやメタファーの

<sup>3</sup> ここでの共通点とは、「類似性 (similarity)」と「隣接性 (contiguity)」を意味する。前者はメタファーにおいて、後者はメトニミーにおいて、それぞれの作用にとっての誘引要素となる。

ような類似性に基づく見立てではなく、「あるものを、それと関連する別のものを代用することで指し示す」こと、すなわち関連性(あるいは、隣接性(contiguity))に基づく指示機能を利用した見立てである。

概念形成の点からこれら3種類の比喩を見た場合、概念形成に直接関わる最も重要な働きは「理解」である。「指示」も概念形成において一定の役割を果たすが、「理解」とは比べものにならない。残ったシミリーの機能であるが、類似性への着目はメタファーの機能の一部となっているので、独立して取り上げるまでのことはない。したがって以下の議論では、メタファーとメトニミーという2つの比喩に限定し、この2つが、思考や行動に欠かせない概念の形成において重要な役割を果たしていること、したがって日常の営みのあらゆる部分に深く浸透していることを立証する。

### 3 メタファー

#### 3.1 メタファーの日常性

メタファーが私たちの日常にありふれている証拠として、(4)–(7)を取り上げてみよう。「目玉焼き」は「目玉(のような形に)焼(いた卵)」のことであり、比喩指標(「~のような形に」)が省略されている。したがって、「目玉焼き」は、卵を目玉に見立てたメタファー表現(=メタファーが言葉に反映された結果)である。同様に、「たい焼き」は「たい(のような形に)焼(いた菓子)」のことであり、「メロンパン」と「カニカマ」もそれぞれ、「(表面がマスク)メロン(の模様に似ている)パン」と「カニ(風味の、すなわち、色や形・食感をカニの身に似せた)カマボコ」のことであり、比喩指標が省略されている見立てという点で、いずれもメタファー表現である。

(4) 目玉焼き

(5) たい焼き

(6) メロンパン

(7) カニカマ

このように、私たちの周りには、言われてみないとそれと気づかないが、実はメタファーによって成り立っている表現があることがわかる。今見た(4)–(7)の例はすべて食べ物の名前であるが、勿論メタファーは文学と食べ物の世界に限られるわけではない。次節では、私たちが日常的に用いている様々なメタファー表現を観察することによって、メタファーが私たちにとって思っていたよりも身近な心の作用であるとともに、概念形成において重要な役割を果たしていることを確認する。

### 3.2 メタファーの機能性

メタファーの本質とは、「ある抽象的事柄を他の具体的事柄を通して理解すること」である。以下の議論では、〈時間〉と〈心〉という2つの抽象的概念を取り上げて、私たちがメタファーを用いてこれらの抽象概念をいかに理解し、使用しているか的一端を見る。こうすることで、メタファーが概念化においていかに重要な役割を担っているのかを確認する。さらに、メタファーは単なる表現技巧や言葉の問題ではなく、精神あるいは心の作用であること、そして心の中に存在するメタファーが様々なメタファー表現を生み出すことをみる。

#### 3.2.1 〈時間〉の概念化に関わるメタファー

私たち人間は社会を形成する生き物である。そして、ある特定の社会において、その構成員は様々な知識を共有することによってコミュニケーションを可能としている。メタファーもその共通知識の一種と見なすことができる。但し、単なる共通知識というわけではない。メタファーは、「AはBである」の形をとることによって、Aという概念をBという概念をとおして理解する概念形成装置でもある(Lakoff and Johnson (1980))。

人間は直接見たり触れたりできないもの(すなわち、抽象的な概念)に対して、それらを訳の分からない未知のものとして放置することなく、理解しやすいものに見立てることで理解できるものとして扱うことをしてきた。たとえば、(8)–(14)は、私たちが〈時間〉という抽象概念を〈存在物〉に見立てることによって、それが何らかの物理的な物としてこの世に存在しているかのように理解し、表現していることを示している<sup>4</sup>。

---

<sup>4</sup> 本稿で用いている例文のほとんどが、いわゆるライトノベルから引用している。これは、ライトノベルというものが概して、形式張らない口語表現によって書かれていることから、ありふれた日常的表現を集めるための原典として利用したことによる。

- (8) 時間があれば皆で夕食でも取りたかったんだがな。  
(聴猫芝居、『ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った?』01)
- (9) 先生も仰った通り、私は彼と彼女に時間を与えたいと思っています。  
(聴猫芝居、同上)
- (10) とりあえず時間を置きましょう。 (聴猫芝居、同上)
- (11) ゲームコントローラーの奪い合いとか押し付け合いで何度も手が触れまくり、攻略法やヒロイン属性について熱い会話を交わし、お互いにとても大切な時間を共有した。 (丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』01)
- (12) あたしはただ、こんな無駄なことに無理やり付き合わされて、大切な人生の時間を潰されるのが嫌だけ。 (丸戸史明、同上)
- (13) みんなのために個別に時間を作ってほしいと頼まれ、俺は受けた。  
(七月隆文、『俺がお嬢様学校に「庶民サンプル」として拉致られた件』11)
- (14) だったら引導を渡してやってそのぶんの時間と労力を他のことに注いだほうが効率がいい。  
(渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』01)

(8)では「(時間が) ある」と言うことによって、時間が物理的に存在する実体であるかのように表現されている。(9)では「(時間を) 与える」と言うことによって、時間が物体として譲渡できる実体であるかのように表現されている。(10)では、「(時間を) 置く」と言うことによって、時間がある場所からある場所に移動される実体であるかのように表現されている。(11)では「(時間を) 共有する」と言うことによって、時間があたかも所有可能な実体であるかのように表現されている。(12)では「(時間を) 潰す」と言うことによって、時間があたかも物理的に破壊できる実体であるかのように表現されている。(13)では「(時間を) 作る」と言うことによって、時間が物理的に創造される実体であるかのように表現されている。(14)では「(時間を) 注ぐ」と言うことによって、時

間があたかも液体であるかのように表現されている。いずれも〈時間〉を〈存在物〉に見立てたメタファー表現である。

一旦〈時間〉が〈存在物〉として見立てられると、結果として数量化が可能となる。すなわち、〈存在物〉としての〈時間〉に対して、それが増えるとか、減るとか、多いとか、少ないとか表現することが可能となる。

(15) でしょ。するとネトゲする時間が減るじゃん。

(聴猫芝居、『ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った?』01)

(16) まだ文化祭まで少し時間があるが、日曜日にやって来て準備をしようって熱心な生徒は沢山居るみたいだった。

(聴猫芝居、『ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った?』04)

(17) 大きなギルドは準備や連携もあり、残り時間が短くなると動きが取れなくなる。(聴猫芝居、同上)

〈時間〉のような抽象的概念を〈存在物〉、とりわけ〈容器〉として見立てることもある。この見立ては特定の目的にかなう。たとえば、何かが〈容器(としての時間)〉の中、あるいは外にあるという関係について言及できるようになる。

(18) 休憩時間中に惰眠ならぬ貴重な睡眠を貪る俺を、聞き慣れた野太い声が邪魔をする。(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』01)

(19) じゃあ、あと五秒以内ね。それ超えたら無効。(丸戸史明、同上)

〈時間〉のような抽象的概念を〈存在物〉、とりわけ〈人間〉として見立てることもある。いわゆる擬人化である。(20)が示すように、私たちは擬人化によって、〈人〉に見立てられた〈時間〉に対して勝負という働きかけを行うことができるようになる。

(20) これからは時間との勝負なんだ。(和ヶ原聡司、『はたらく魔王さま!』)

日本のような貨幣経済の文化では、〈時間〉を〈お金〉や〈貴重品〉に見立てることもある。心の中に共通概念として「時は金なり」というメタファーがあると、(21)－(24)のような表現が生まれ、使用されるようになる。

- (21) たとえそれらの準備のために二時間ほど費やしていたとしても・・・  
(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』01)
- (22) 創作のアイデアなんてものは、時間をかけてもいいものができるとは限らないし・・・  
(丸戸史明、同上)
- (23) 何もしてなく無駄に時間を消費しているだけのはずなのに・・・  
(西尾維新、『偽物語 (上)』)
- (24) 何かを成し遂げたいなら、一秒でも時間を稼ごうとするな!!  
(鎌池和馬、『とある魔術の禁書目録』01)

これらの例において、もともとお金について述べる表現（「(お金を) 費やす」、「(お金を) かける」、「(お金を) 消費する」、「(お金を) 稼ぐ」）が時間について述べるのに使われている。時間がお金としてメタファー的に理解されているのである。

最後に、〈時間〉を〈存在物〉、とりわけ〈動くもの〉として見立てた例をみておこう。このように見立てられた〈時間〉は、私たちに向かって動いてきたり、私たちから遠ざかったり、動きを止めたり、動き始めたりする。

- (25) いつまで経っても何も起きない。時間が止まったかのような錯覚。  
(鎌池和馬、『とある魔術の禁書目録』02)
- (26) 言い争ってる内に大分時間が過ぎてしまいましたわね。  
(鎌池和馬、『とある魔術の禁書目録』08)
- (27) でも先生。次の競技の時間が。迫っているし。  
(鎌池和馬、『とある魔術の禁書目録』10)

(28) 私は時間が来るまで学園都市の外のホテルで待機していました。

(鎌池和馬、同上)

ここで〈時間〉の概念化から分かったことをまとめてみよう。私たちは、時間という目に見えない触ることもできない抽象概念を、経験上よく知っている具体的なものに見立てることで、理解しやすいものとして概念化している。私たちは、言語活動だけでなく、思考や行動に至るあらゆる日常活動において、概念を必要としている。したがって、必然的にメタファーもまた、これらの領域に深く関わっていることになる。たとえば、私たちが〈時は金なり〉というメタファーに基づいて、時間をお金のように理解し表現する時、私たちの思考や行動はメタファーによって構造を与えられていると言っても過言ではない。

### 3.2.2 〈心〉の概念化に関わるメタファー

前節では、抽象概念である〈時間〉が〈存在物〉に見立てられることによって、様々な方法で理解され、表現されていることを観察した。同様のことが〈心〉という抽象概念にも当てはまる。私たちは〈心〉という抽象概念を〈存在物〉に見立てることによって、それが何らかの物理的な実体としてこの世に存在しているかのように理解し、表現する。

(29) しかし雪ノ下はそういう男の純情を介するような人並みの心を持っていない。(渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』01)

(30) そして、誰かの心を動かさせたならとても嬉しい。(渡航、同上)

(31) それでも加藤のその言葉は、詩羽先輩の心を掴むができなかったのか…(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』01)

(32) 初めて会ったころと比べれば、こいつも少しは心を開いてくれたのかもしれないな。(伏見つかさ、『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』04)

(33) 童女の閉じかけの心をどうにか解そうと試みるが、結果は振るわず幼子は首を振るばかり。(長月達平、『Re：ゼロから始める異世界生活』01)

- (34) 遊び心を失ってはいかんぞ、阿良々木先輩。  
 (西尾維新、『化物語(下)』)
- (35) あなたのような男に心を奪われたことは、私にとって一生の恥よ。  
 (西尾維新、『偽物語(上)』)
- (36) ……心が読めるの?  
 (西尾維新、『囃物語』)
- (37) どうしてそんな風に見えてしまうんだ。心が汚れてるぜ、忍。  
 (西尾維新、『鬼物語』)
- (38) 俺の心が揺らいでいるのを敏感に察知したのか、材木座がにやりと笑って追い打ちをかける。  
 (渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』02)
- (39) あまりの強風に心が砕けそうになるが、必死でペダルを踏み込んだ。  
 (渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』06)
- (40) そうやって自分を励ましないと心が折れてしまいそうだ。(渡航、同上)

前節で観察した時間のメタファー表現と同様に、(29)－(40)で用いられている〈心〉も存在物としてメタファー的に理解されている。(29)ではあたかも所有可能な物理的実体として、(30)ではあたかも移動可能な物理的実体として、(31)ではあたかも掌握可能な物理的実体として表現されている。(32)－(33)では、〈心〉は開閉可能な扉のようなものとして表現されているし、(34)－(35)では、何らかの理由で手元から離れる可能性がある物理的実体として描かれている。(36)では〈心〉があたかも文字のような可視的記号であるかのように表現されているし、(37)では〈心〉が何らかの理由で綺麗な状態から汚れた状態へと変化する、物理的実体のように表現されている。(38)では〈心〉があたかもバランスをとりながら立つ物理的実体であり、そのバランスが失われた状態が描かれている。(39)では〈心〉があたかも岩や壁のような物理的実体であり、それが砕けてバラバラになる可能性が、(40)では〈心〉があたかも棒や枝のような物理的実体であり、それが強度を失い折れてしまう可能性が表現されている。いず

れの場合も、抽象概念である〈心〉が〈存在物〉としてメタファー的に理解され、表現されていることがよくわかる。

〈時間〉の場合と同様に、〈心〉が〈存在物〉に見立てられることによって、それは内容量を計測できる実体として理解される。結果として〈心〉の数量化が可能となり、(41)－(42)のように軽くなったり、重くなったりする。また、〈心が〉平面的に把握されると、(43)－(44)のように（面積が）広くなったり、狭くなったりする。

(41) おかげでいくらか心が軽くなる。  
（渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』08）

(42) 頭の中でずっと、埒の明かない、答の出ないことをぐるぐる考えているから心が重くなるんであって…  
（西尾維新、『花物語』）

(43) 心が広いな。そんな簡単に許してもらえるとは思わなかった。  
（西尾維新、『化物語（上）』）

(44) 心が狭い……。 （西尾維新、『暦物語』）

〈時間〉が〈容器〉に見立てられるのと同様に、〈心〉も〈容器〉に見立てられることがある。このように理解された〈心〉は、容器が持つある特性の点から表現されるようになる。

(45) ところがだよ。心の中で舌打ちした。  
（渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』01）

(46) 絶対内心では馬鹿にしてるよなって思っちゃうんだよ。  
（聴猫芝居、『ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った？』01）

(47) 登校途中で出会った加藤恵は、普通に、心の底からごく普通に俺に接してきた。  
（丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』01）

(48) 心が満たされていくのを感じたよ。 （西尾維新、『花物語』）

(45)－(46)では心という容器の内側について、(47)ではその底の部分について言及されている。また、(48)では器としての心が、何か（おそらく、優越感や安心感）によって一杯になることが描写されている。

〈時間〉は〈存在物〉、とりわけ〈体〉として見立てられることがある。心が体の一部として感じられることは、直感的に理解しやすい。このような見立てが成り立つと、〈心〉は〈体の一部〉として様々な物理的現象に晒されたり、肉体的な経験をすることになる。

(49) 由比ヶ浜の料理といえば、あの黒々とした鉄のようなクッキーがまっさきに想起される。俺も思い出ただけで喉と心が渴いてくる。

(渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』01)

(50) すこしは心が痛みませんか、あんな混乱を巻きおこして。

(田中芳樹、『薬師寺涼子の怪奇事件簿 夜光曲』)

(51) 本当にそれで女の子の心は癒やされるのか!?

(伏見つかさ、『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』02)

(49)では、心と喉が並列的に扱われており、「渴く」と表現されている。不味いクッキーを食べたときの味覚経験が喉の渴きという身体的感覚を喚起すると同時に、心の渴きという心理的拒否感も喚起しているのであろう。(50)－(51)では、肉体の一部として見立てられた心が、あたかも身体的に傷を負ういことがあるかのように、またその傷が治ることがあるかのように表現されている。

〈時間〉が〈人〉に見立てられたのと同様に、〈心〉も〈人〉に見立てられることがある。〈人〉に見立てられた〈心〉は、踊ったり((52))、ざわめいたり((53))、何かから逃げたり((54))、目(視覚器官)を持っていたり((55))、悲鳴を上げたり((56))する。

(52) 女子との会話ってもっと心躍るものじゃないのかよ。

(渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』01)

(53) それを聞いて、心が、ざわついた。

(渡航、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』08)

(54) そんな風に考えるのは、心が逃げてる証拠だよ。(西尾維新、『傷物語』)

(55) それは君が心の眼でものごとを見ていないからよ。

(田中芳樹、『薬師寺涼子の怪奇事件簿 水妖日にご用心』)

(56) 引き裂かれた心の悲鳴が、上条の耳に叩き付けられる。

(鎌池和馬、『とある魔術の禁書目録』06)

以上、〈心〉の概念化から分かったことをまとめてみよう。私たちは、〈心〉という目に見えない、触ることもできない抽象的なものを、経験的によく知っている具体的なものに見立てることで、理解しやすいものとして概念化している。私たちは、〈心〉という概念に関連して思考したり行動したりするとき、必然的に、メタファーによって形成された概念を用いて思考したり、行動したりすることになる。このようなとき、私たちの思考や行動はメタファーによって支配されていると言ってもよい。

私たちはこれまで〈時間〉の概念化や〈心〉の概念化に関連して、メタファーが重要な役割を果たしていることを見てきた。ここまでの証拠が与えられると、私たちの周りにメタファー表現が氾濫していることや、大多数の言語表現が多かれ少なかれメタファー的であることも十分に納得がいくことである。

## 4 メトニミー

### 4.1 メトニミーの日常性

メトニミーとは、「あるものを、それと関連する別のものを代用することで指し示す」こと、すなわち指示機能に基づく見立てである。3節でメタファーの日常性について観察したが、メトニミーに関しても同様の性質が認められる。(57)において〈ご飯(=米飯)〉は、〈食事(全体)〉を指し示している。(58)では〈油揚げ〉が入ったうどんやそばの名称の一部として、油揚げではなく、油揚げが好物とされる〈きつね〉を使っている。(59)では〈桜の花〉を指し示すために、一般的な名称の〈花〉を使っている。(60)では、童話の中の登場人物が被っている〈赤い頭巾〉を使って、その登場人物を指し示している。(61)では、出来事と出来事の間に成立する因果関係に基づいて、原因となる出来事(=用を足す)を指し示すために結果となる出来事(=手を洗う)が使用されてい

る。

(57) 朝ご飯、昼ご飯、夕ご飯（晩ご飯）

(58) きつねうどん、きつねそば

(59) 花見

(60) 赤ずきん

(61) お手洗い

このように、私たちが普段日常的に使っている表現の中にも、言われてみないとそれと気づかないが、メトニミーが使われている表現が数多くある。

#### 4.2 メトニミーの体系性

メトニミーの機能は「指示」であるが、メタファーの機能である「理解」と比べると、新しい概念を生産的に生み出す力に欠ける。しかし、概念間に成立する特定の関係に基づいて、ある概念に新しい意味を付加したり、メタファー表現を生み出すきっかけを作ったりすることがある。実際、メタファーと相互作用するということは、メトニミーも概念形成に関わる心のはたらきであることを意味する。この節では、メトニミーが一般性に富むフォーミュラを持つことと、メタファーほどではないが概念形成に与する可能性を示す。

まず初めに、(57)でみたメトニミーの例に目を向けてみよう。〈朝ご飯〉、〈昼ご飯〉、〈夕ご飯（晩ご飯）〉といったメトニミー表現において、食事の一部である〈ご飯〉が〈食事全体〉を指し示している。これはメトニミーのタイプの一つである「〈部分〉で〈全体〉を指し示す」の事例にあたる。〈部分〉と〈全体〉の関係はメトニミーを適用しやすい典型である。認知的な観点から言い換えれば、このとき私たちは、認知的により顕著な〈部分〉の方を用いて、背景化している（＝目立たなくなっている）〈全体〉の方に言及していることになる。〈部分〉で〈全体〉を指し示している他の事例も見てみよう。(62a)は様々なメトニミー表現を生み出すことのできる、非常に生産的な規則である。この規則は、〈手（部位）〉が〈人（全体）〉を指し示しているので、「〈部分〉で〈全体〉を指

し示す」という上位タイプに対する下位タイプといえる。

(62)a. ○+手の形で〈～する人〉を指し示す。

b. 話し手、聞き手、読み手、書き手、作り手、受け手、騎手、射手、運転手、操縦手など

〈全体〉が〈部分〉を、〈一般〉が〈特殊〉を指し示すような逆の場合もある。(63)では、一般的名称である〈花〉が、特定の花である〈桜の花〉を指し示している。(64)では、一般的名称である〈鳥〉が、特定の鳥である〈鶏〉を指し示している。(65)では、一般的名称である〈熱〉が、より特定の値の範囲である〈正常時よりも高い熱〉を指し示している。

(63) 花見

(64) 焼き鳥

(65) あ、あんた熱でもあるんじゃないの!?

(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』06)

〈容器〉が〈内容物〉を指し示すタイプも一般性が高く、日常的にもよく用いられる。たとえば(66)では、容器に相当する〈鍋〉が内容物に相当する〈料理〉を指し示している。また、(67)では、容器に相当する〈会場〉が内容物に相当する〈観客〉を指し示している。

(66) 何か鍋でも食べたいわね。

(赤川次郎、『黒い壁』)

(67) 今までの試合とは明らかに異なり好戦的な王馬に会場がざわと戦慄く。

(海空りく、『落第騎士の英雄譚』08)

つぎに、〈組織〉が〈成員〉を指し示すタイプを見てみよう。このタイプもやはり、私たちが日常的に用いているメトニミーの一種である。(68)では、行政機関である〈警察〉が、そこで働く公務員である〈警察官〉を指し示している。(69)では、高等学校の〈磐田南〉が、そこに所属する生徒である〈野球部員〉

を指し示している。

- (68) アコ、早急に、可能な限り急いで警察に電話だ。  
(聴猫芝居、『ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った?』01)
- (69) 磐田南が昨夏の2回戦で6-0と勝利した駿河総合との乱打戦を制した。  
(『スポーツ報知』2016.07.18)

一方の概念を認知的に顕著にさせる文脈が与えられれば、そこから容易にメトニミー表現を作り出すことができる。たとえば、(58)の「きつねうどん」や「きつねそば」は、〈きつね〉を使って、その好物である〈油揚げ〉を指し示している例であった。また、(60)の〈赤ずきん〉は、童話の中の登場人物が被っている〈赤い頭巾〉を使って、その登場人物を指し示している例であった。(61)に至っては、結果行為である〈手を洗う〉を使って原因行為である〈用を足す〉を、文脈によっては〈一連の行為が行われる場所(=トイレ)〉を指し示す事例であった。この他にも、(70)では、〈電話〉が〈電話回線〉を指し示しているし、(71)では、〈ギター〉がギターで演奏している〈曲〉を指し示している。(72)では、特殊車両である〈パトカー〉と〈救急車〉が、その車両に乗っている職業人である〈警察官〉と〈救急救命士〉を指し示している。いずれも私たちが日常的に使用している表現である。

- (70) 電話は繋がらない。メールも返事が来ない。  
(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』05)
- (71) そう、こいつのギターを聴いてしまうまでは・・・  
(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた FD』)
- (72) パトカーと救急車が、あいついで駆けつけてきたのだ。  
(田中芳樹、『薬師寺涼子の怪奇事件簿 夜光曲』)

さらなる例を見てみよう。(73)は、2016年8月26日の『日本経済新聞』の記事である。ここでは、都市名である〈磐田〉が、サッカーチームである〈ジュビロ磐田〉を指し示している。

- (73) サッカーの天皇杯全日本選手権（日本サッカー協会、Jリーグ主催、共同通信社、NHK共催）第2日は28日、福岡市のレベルファイブスタジアムなどで1回戦10試合が行われ、J1勢の福岡はJ3の鹿児島（鹿児島）に7-2で、磐田は岐阜セカンド（岐阜）に7-0でそれぞれ優勝した。  
（『日本経済新聞』2016.08.26）

(74)の例は、2016年8月24日の『夕刊フジ』の記事である。ここでは、連続した出来事間の隣接関係がメトニミーの誘因となっている。つまり、〈ユニフォームを脱ぐ〉という出来事によって、その直後に発生する〈引退する〉という出来事が指し示されている。

- (74) 世界を魅了した美女アスリートがユニフォームを脱いだ。女子棒高跳びの世界記録保持者、エレナ・イシンバエワ選手（34）＝ロシア＝が19日、「棒高跳びとはさよならする」と現役引退を表明した。  
（『夕刊フジ』2016.08.24）

以上、様々なタイプのメトニミーを観察してきたが、これらには共通して、「ある概念を、それと関連する別の概念を使って指し示す」機能があることがわかった。さらにメトニミーもメタファー同様、私たちの日々の生活に深く浸透しており、私たちは日常的にこの機能を使ってコミュニケーションを図っていることもわかった。

メトニミーは単なる指示のズレとして扱うべきものではなく、概念形成にも影響を与える心の作用として見るべきである。なぜならメトニミーがメタファーほどではないが、概念形成において特定の役割を果たしていると考えられるからである。たとえば、私たちは桜の花を觀賞することで春の訪れを寿ぐ習慣を「花見」と言うが、ここでは、桜の花（特定）の代わりに花（一般）というメトニミー表現を用いている。このことは、私たちがもっている〈花〉の概念において、春の訪れを寿ぐという文脈において鑑賞の対象となる花が桜の花であるという関連づけが成立していることを意味している。また、「今日は鍋でも食べよう」と言うとき、私たちは鍋を用いて調理する料理（内容物）の代わりに鍋（器）というメトニミー表現を用いている。この語法が慣習化することは、〈鍋〉の概念が含んでいる様々な百科事典的情報の中でも、〈（鍋を用いて調理する）料理〉との関連づけが強化されることを意味する。

### 4.3 メトニミーの機能性 ～〈手〉に関わる様々な概念化～

4.3節では、メトニミーが概念形成に与するケースを、〈手〉という部位をキーワードにして詳細に論じる。私たち人間はその歴史の中で、手を使って様々な経験を積み重ねてきたし、今現在も積み重ねている。当然、〈手〉に関連してあらゆる社会・文化に共通した概念化がなされただろうし、日本文化に特化した概念化もなされたであろう。以下の議論では、日本文化に見られる〈手〉の概念化をメトニミーの点から観察し、その概念形成における役割について考察する。

まず初めに、〈体（全体）〉を指し示す〈部位（部分）〉としての〈手〉から始めよう。私たちは何らかの作業を行うとき、たいてい手を使って行うものである。したがって、この経験が基になって、〈手〉は〈仕事をする人〉を指し示すことがある。

(75) ともかく十二時の昼時に、手が足りなくなるんだ。

(赤川次郎、『忘れられた花嫁』)

〈手〉が〈仕事をする人〉を指し示すようになると、その指示対象は〈仕事をする人の力〉や〈仕事をする人の労力〉へと横滑りする。(76)では、〈手〉が〈人の力〉を指し示している。

(76) 人の手なんて借りる必要はないと——あるいは、他人に助けてもらう必要なんて皆無だと、そう確信していた。(西尾維新、『化物語（上）』)

さらに、「手を借りる」という表現は、「協力や助力をもとめる」という意味のメタファーになっているので、ここでは、メトニミー表現である「手」がメタファー表現である「手を借りる」の一部となっていることがわかる。メタファーとメトニミーの相互作用である。

つぎに(77)を見てみよう。ここでは〈手〉が〈労力〉を指し示している。

(77) 美智留よ……俺が勉強以外で手を抜いてるのを見たことあるか？

(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』04)

「手を抜く」という表現は、「必要な手間を省く」という意味のメタファー表

現であるので、ここでもメタファーとメトニミーの相互作用を認めることができる。すなわち、メトニミー表現である「手」がメタファー表現である「手を抜く」の一部となっているのである。

〈手〉の指示対象が〈人〉ではなく〈仕事〉そのものへと横滑りし、〈事を行うこと〉を指し示すこともある。たとえば、(78)の「手をつける」は、「(その行為の結果として) 特定の作業が始まる」ことを意味し、(79)の「手を放す」は、「(その行為の結果として) 特定の作業が中断する」ことを意味する。

(78) ただ下巻の方はまったくの手つかずだけど。

(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』04)

(79) 先生ちょっと手が放せないから今から彼女に校内を案内してあげてくれない？

(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』01)

(80)で用いられている「手」も〈事を行うこと〉を象徴しているが、「手を出す」は「関与する(=ある物事に関係する)」ことを意味し、(78)－(79)と比べると結果状態に焦点が置かれているようだ。

(80) ラインだとう？英梨々のくせに今どきの女子高生っぽいツールに手を出しゃがって！

(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』07)

〈手〉が〈事を行うこと〉を指し示すようになると、その指示対象は〈事を行うための技術・手段・方法・能力〉へと横滑りする。(81)では、〈手〉が〈手段・方法〉を指し示しており、(82)－(84)では〈能力〉を指し示している。

(81) いくらなんでも、さすがに同じ手は通用しないだろうし。

(西尾維新、『化物語(上)』)

(82) それでもやっぱり、俺なんかの手の届かないところにいるんだよ、霞詩子は！

(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』07)

(83) この手の話が好きな亜由美としても、現実の事件となると、とても手に負えない。

(赤川次郎、『忙しい花嫁』)

(84) 抱き起そうとしても、金山の重さは、尚美の手に余った。

(赤川次郎、『魔女たちの長い眠り』)

(82)の「手が届かない」、(83)の「手に負えない」、(84)の「手に余る」はどれも、「能力が不十分である」ことを意味するメタファー表現である。このことは、能力を象徴する〈手〉がメタファー表現の一部として現れ、そのメタファー表現全体の解釈に一助を加えていることを意味している。

ついでながら、能力を象徴するメトニミー表現の「手」と他のメタファー表現との相互作用という観点から、(85)に示した「上手(じょうず)」と「下手(へた)」を分析してみよう。言うまでも無く、(85)で用いられている〈手〉は〈能力〉を指し示す〈手〉である。

(85) 上手(じょうず)・下手(へた)

一方、「上」と「下」はある基準よりも能力が高い、または低いことを意味するメタファー表現である。つまり、「上手」と「下手」はメタファーとメトニミーの組み合わせによって成り立っていることになる。

つぎに、〈縁〉や〈協力関係〉を象徴する「手」について考察してみよう。私たちは、人と人が手をつないでいると、その人たちは仲がいいのだと思う。また、一人一人の力(あるいは〈手〉)では成し遂げられないことでも、二人、三人と仲間が増えれば成し遂げられることがあると知っている。このような経験から私たちは、〈手〉を〈縁〉や〈協力関係〉の象徴と捉える。たとえば、(86)において、〈手〉は〈協力関係〉を指し示し、「手を組む」は「仲間になる」ことを意味する。(87)では、〈手〉が〈縁〉、とりわけ〈男女の恋愛関係〉を指し示し、これを断ち切ることは、すなわち「恋愛関係を解消する」ことを意味する。

(86) まず私が吉野さんに接近するわ。そして、手を組もうとしていると信じさせる…… (赤川次郎、『MとN探偵局 悪魔を追い詰める!』)

(87) 楽しくない「浮気」なんか、何の意味もないだろう。そろそろあの女とも手を切るころだな、と中代は思っていた。

(赤川次郎、『禁じられた過去』)

「手を組む」ことによって結果「協力関係が成立する」と考えれば、(86)の「手を組む」は、原因によって結果を指し示すメトニミー表現と見做すことができる。しかし、「協力関係の成立」が（物理的に）「手を組む」行為を通してメタファー的に理解されていると考えることも可能であり、この場合はメトニミー表現がメタファー表現の一部となって、両者が相互作用していることを意味する。(87)で用いられている「手を切る」はかなりメタファー的である。〈男女関係〉自体が抽象的であることに加えて、それを終わらせることを「切る」と表現している点でメタファーと言ってよいだろう。そうならば、メトニミー表現がメタファー表現の一部となって、両者が相互作用していることになる。

別の事例に議論を移そう。私たちは、手で何かを掴み、それを自分の所有物とする。この経験から、私たちは〈手〉を〈所有〉の象徴と見なす。たとえば、(88)と(89)において用いられている「手」は、〈所有〉を指し示している。

(88) 加藤は手に入れたばかりの新しい帽子を手元でぐるぐる回して遊んでいる。  
(丸戸史明、『冴えない彼女の育てかた』02)

(89) 経営権を手放して、十数年も株の配当だけで生活しているとうなるのだろうか。

(七月隆文、『俺がお嬢様学校に「庶民サンプル」として拉致られた件』08)

(88)の「手に入れる」は「自分の物にする」ことを、(89)の「手放す」は「所有していたものを他人に渡す」ことを意味する。これらの例は、結果状態を指し示すメトニミー表現と考えることができるが、一方で、「所有権を得る」ことを「何かを（物理的に）自分の手の中に収める」ことを通して、「所有権を失う」ことを「自分の手に握っていた物を（物理的に）放す」ことを通してそれぞれ理解していると見た場合、メタファー表現だと見做すこともできる。すなわち、(88)の「手に入れる」と(89)の「手放す」は、この意味でメタファー的である。これらの例は、メトニミーがメタファーを誘引している例として分析できるかもしれないが、紙面の都合上これ以上立ち入らないこととする。

以上、〈手〉に関わる様々なメトニミータイプを観察することで以下のことを明らかにした。第1に、メトニミーはメタファー同様、私たちの日常にありふれている、身近な心のはたらきである。第2に、メトニミーの機能である「指示」は、メタファーの機能である「理解」と比較すると、新しい概念を生産的

に生み出す力に欠ける。しかし、概念間に成立する特定の隣接関係に基づいて、両者の関連づけを強化したり、ある概念領域の内部構造を修正する効果をもたらすことがある。第3に、メトニミー表現がメタファー表現の一部となるという点で、両者間に相互作用が認められる。

## 5 まとめ

本稿では、比喩、とりわけメタファーとメトニミーの2つを取り上げ、世間一般に受け入れられているイメージ、すなわち「比喩とは修辭的な文飾の技巧のことであり、したがって比喩は文学の世界に限られる」というイメージが間違いであることを立証した。メタファーとメトニミーは、1) 言葉や表現といった点だけでなく、思考や行動に至るまで、日常の営みのあらゆるところに深く浸透しており、2) 私たちが思考したり、行動したりするときに欠かせない概念を形成するうえで重要な役割を果たしている。さらに、3) メタファーとメトニミーが概念形成において役割を果たしているということは、すなわち、これらが精神 (=心、脳) の作用であることを意味する。

## 参考文献

- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press, Chicago and London.
- 瀬戸賢一 (1995), 『メタファー思考—意味と認識のしくみ』, 講談社, 東京.

## 事典

- 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目電子辞書版』, ブリタニカジャパン, 東京.
- 『明鏡国語辞典 第二版』, 大修館書店, 東京.

## 小説

- 赤川次郎 (1984), 『忘れられた花嫁』, 角川書店, 東京.
- 赤川次郎 (1986), 『忙しい花嫁』, 角川書店, 東京.
- 赤川次郎 (1987), 『魔女たちの長い眠り』, 角川書店, 東京.

- 赤川次郎 (2001), 『禁じられた過去』, 角川書店, 東京.
- 赤川次郎 (2011), 『黒い壁』, 角川書店, 東京.
- 赤川次郎 (2011), 『MとN探偵局 悪魔を追い詰める!』, 実業之日本社, 東京.
- 鎌池和馬 (2004), 『とある魔術の禁書目録』, 1巻, スクウェア・エニックス, 東京.
- 鎌池和馬 (2004), 『とある魔術の禁書目録』, 2巻, スクウェア・エニックス, 東京.
- 鎌池和馬 (2005), 『とある魔術の禁書目録』, 6巻, スクウェア・エニックス, 東京.
- 鎌池和馬 (2006), 『とある魔術の禁書目録』, 8巻, スクウェア・エニックス, 東京.
- 鎌池和馬 (2006), 『とある魔術の禁書目録』, 10巻, スクウェア・エニックス, 東京.
- 聴猫芝居 (2013), 『ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った?』, 1巻, KADO KAWA, 東京.
- 聴猫芝居 (2014), 『ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った?』, 4巻, KADO KAWA, 東京.
- 田中芳樹 (2005), 『薬師寺涼子の怪奇事件簿 夜光曲』, 祥伝社, 東京.
- 田中芳樹 (2010), 『薬師寺涼子の怪奇事件簿 水妖日にご用心』, 講談社, 東京.
- 長月達平 (2014), 『Re:ゼロから始める異世界生活』, 1巻, KADOKAWA, 東京.
- 七月隆文 (2014), 『俺がお嬢様学校に「庶民サンプル」として拉致られた件』, 8巻, 一迅社, 東京.
- 七月隆文 (2016), 『俺がお嬢様学校に「庶民サンプル」として拉致られた件』, 11巻, 一迅社, 東京.
- 西尾維新 (2006), 『化物語 (上)』, 講談社, 東京.
- 西尾維新 (2006), 『化物語 (下)』, 講談社, 東京.
- 西尾維新 (2008), 『傷物語』, 講談社, 東京.
- 西尾維新 (2008), 『偽物語 (上)』, 講談社, 東京.
- 西尾維新 (2008), 『偽物語 (下)』, 講談社, 東京.
- 西尾維新 (2011), 『四物語』, 講談社, 東京.
- 西尾維新 (2011), 『花物語』, 講談社, 東京.
- 西尾維新 (2011), 『鬼物語』, 講談社, 東京.

- 伏見つかさ (2008), 『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』, 2巻, アスキー・メディアワークス, 東京.
- 伏見つかさ (2009), 『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』, 4巻, アスキー・メディアワークス, 東京.
- 丸戸史明 (2012), 『冴えない彼女の育てかた』, 1巻, KADOKAWA富士見書房, 東京.
- 丸戸史明 (2012), 『冴えない彼女の育てかた』, 2巻, KADOKAWA富士見書房, 東京.
- 丸戸史明 (2013), 『冴えない彼女の育てかた』, 4巻, KADOKAWA富士見書房, 東京.
- 丸戸史明 (2013), 『冴えない彼女の育てかた』, 5巻, KADOKAWA富士見書房, 東京.
- 丸戸史明 (2014), 『冴えない彼女の育てかた』, 6巻, KADOKAWA富士見書房, 東京.
- 丸戸史明 (2014), 『冴えない彼女の育てかた』, 7巻, KADOKAWA富士見書房, 東京.
- 丸戸史明 (2014), 『冴えない彼女の育てかたFD』, KADOKAWA富士見書房, 東京.
- 海空りく (2015), 『落第騎士の英雄譚』, 8巻, SBクリエイティブ, 東京.
- 和ヶ原聡司 (2011), 『はたらく魔王さま!』, アスキー・メディアワークス, 東京.
- 渡航 (2011), 『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』, 1巻, 小学館, 東京.
- 渡航 (2011), 『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』, 2巻, 小学館, 東京.
- 渡航 (2012), 『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』, 6巻, 小学館, 東京.
- 渡航 (2013), 『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』, 8巻, 小学館, 東京.

## その他

『日本経済新聞』, 2016. 08. 26.

『夕刊フジ』, 2016.08.24.

『スポーツ報知』, 2016.07.18.